

心臓外科の名医が行った手術は、心臓の弁を人工弁に交換する「弁置換術」だ。術者が手術する間に患者は人工心肺装置に接続され、心臓の働きを補助する。手術時間は2時間を超え、手術後も多くの心臓外科医より圧倒的に多い。



医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く！

ニッポンの医療現場 第50回

心臓外科の名医が告白 いい外科医が育たないのは 日本の大学の責任

以前と違い、患者が病院や医師を選ぶ時代になった。しかし、いざというときに頼りになる医師が日本のどこにでもいるわけではない。なぜ、医療大国ニッポンで優秀な外科医が大学から輩出されないのか。大学病院を飛び出し、外国で武者修行を積んだ心臓外科の名医が、その理由を明かした。

超難関の心臓手術を
淡々とこなす手術のプロ

外科医にとって最も重要なミッションは、患者を手術で治すことだろう。たくさん症例をこなすことで、結果を出し続ける。名医の基準はさまざまだが、少なくとも外科医にとつての「名医」とは、症例数や経験が豊富で、かつ目の前の患者を何とかして治そうという、プロフェッショナルとしての意識が高い医師だと思ふ。

12月某日、東京ハートセンター（東京都品川区）では、わが国を代表する心臓外科医、南淵明宏医師（センター長）による心臓手術が行われていた。事前に聞いた情報によると、この日の手術は再手術で、癒着（組織同士がくっついた状態）があり、相当に難易度が高いケースだという。

手術現場はさぞかし緊張感が漂っているだろうと想像する読者も多いと思うが、実際はまったく違っていた。BGMにJ・POPが流れ、スタッフもリラックスモードだ。



取材で診察する外科医の現状を語る南淵医師

練れのスタッフ。どんなに難しい手術でも、それを淡々とこなす成功させる。まさに豊富な症例と経験がなせる業なのだろう。

院内の外科医はダメと紹介状を書く内科医も

敬ある手術の中で最も患者への負担が大きいのが、心臓手術だ。昨今の高齢化や食生活の欧米化などによって、心臓病の患者数は増加傾向にある。患者や家族にとつて、万が一のときに頼りたいのは、やはり名医と呼ばれる医師だ。

南淵医師は大学を卒業後、大病院と国立循環器病センターでの研修を経て、オーストラリアとシンガポールで研修を積んだ。その後帰国したが、母校の医局を離れて武者修行に出た彼に対し、大学側から用意されたポスト（関連病院への紹介）はなかった。関東地方の民間病院で、地元患者を対象に心臓手術を始めたのが、20年ほど前だった。大病院を捨て、孤立無援だった南淵医師が、なぜ名医と評される心臓外科医になり得たのか。その理由

は、症例数の多さと、手術が難しい患者も引き受けてきた実績が周知されるようになったことだ。

先に紹介したように、南淵医師はコンスタントに年間200症例ほどの手術を行う。南淵医師は、「心臓外科医としては、最低でも年間1000例は必要」というのが、一人で1000例を超える医師を擁する大病院はほとんどない。

こうした南淵医師の実力を高く評価し、自身や家族の治療を依頼する著名人や同業者が後を絶たない。

旗の台福徳外科病棟の沖野光彦院長も、同センターで心臓手術を受けた。外科医のプロとして進んだのが、南淵医師だった。

「彼は想定外のことにも強い医師と聞いていた。私も手術をする側の人間、手術に対する向き合い方が私と一致していました。話を聞いても、造詣が深い。よく勉強していると思えましたね」（沖野院長）

術後も順調で、退院して5日後には助手として脳外科の手術に立ったという。このほか、有名な政治家

や著名人や芸術家、その家族も南淵医師を頼って心臓手術を受けている。

「以前、「なぜ、ここのか」と政治家の一人に尋ねたところ、人。だと答えていました。多くの人間を見てきたから、その人間が見えないうと、安心して命を任せられないということだったのでしょ」（南淵医師）

しかし、残念ながら、今の日本の大病院をはじめ、多くの医療機関では、名医どころかプロの外科医でさえ育ちにくい。その現状について南淵医師は話す。

「高齢だから、重い持病があるからといって手術を断るケースが目立つ。麻酔科医も手術に協力しながらない。今の医療現場では、責任を取りたくない」と、保身に走る医師が増えているんです。そんな先輩を見て、外科医になりたいと思う若手医師がいると思いませんか？ 外科医は3K（きつ、きたない、給料安い）

といわれていますが、それが理由でなり手がいなくなつたわけではないんです。実際、こうした外科医の実情を憂う内科医が、手術が必要になると、外部の病院に患者を送る。「父の手術をお願いしたい。自分の病院では受けさせられない」と、紹介してきた大病院の内科医もいた。プロは分かっているのだ。

翻つて、患者やその家族は、大病院の医師というだけで実力を確かめずに信用してしまふことがある。しかしそれは決して正しい選択ではない。命に関わるような手術は、症例数の豊富な実績ある医師とチームを選ぶ。これが賢い患者の条件であることはいくらでもない。

手術台に横たわる患者の右側に立ち、執刀する南淵医師の指示に、助手の医師や麻酔科医、そして器械出しの看護師や人工心肺を操る臨床工学技士があうんの呼吸で対応する。プロによるチームプレーが行われていた。

「僕の仕事は、心臓手術をすることで生活が成り立つ。プロの心臓外科医です。だから、患者さんが来たら、単純にうれいすし、患者さんが喜ぶようなことを、24時間、365日考えていますね」（南淵医師）

昨年だけで230例の心臓手術を行った南淵医師と、それをバックアップする手

開胸の弁を切り取り、弁の根元と人工弁とを専用の糸で縫合した